当歳グマの取り扱いについて

（知床ヒグマ対策連絡会議・斜里側）

■　平成３０年５月２７日（日）に、０歳１頭連れの親子ヒグマが観光宿舎の物置を破壊し、内部に置かれていた生ゴミを食べた事例が発生。子グマのゴミ採食は確認されず。

■　当該親子ヒグマへの対応方針、特に当歳グマの捕獲の是非及び捕獲した場合の飼養の是非について、知床ヒグマ対策連絡会議で検討を行った。
（参集者：環境省、林野庁、北海道、斜里町、知床財団）

【第１回】日時：平成３０年５月２８日（月）
【第２回】日時：平成３０年５月３１日（木）
【第３回】日時：平成３０年６月　１日（金）
【第４回】日時：平成３０年６月　７日（木）

【各機関の意見】

（環境省）

・　現在の管理計画上、「飼養」等の生け捕り後の取扱いは規定されていない。そのような取扱いがない現状において、今回の個別事案のみを判断材料として野生鳥獣を人間の管理下に置くことは望ましくない。

・　今後今回のような事案が発生した際にはどのように対応するのかといった中長期的な対応も視野に入れ、WG 委員の意見も聴きつつ総合的に検討すべき重要な問題である。

（林野庁）

・　ケースバイケースで取り扱いを行うのではなく、基本的考えに基づき対処していくことが肝要（①受入れ態勢が有る場合と無い場合の扱い②受入れ態勢の有無に係わらずの扱い）

・　人間側の不適切な実態により熊を誘引してしまった結果、捕獲しなければいけない状態になってしまったならば、人間の責任において残された小熊の将来を確保（クマ牧場）出来るのであればそれが道理。

（北海道）

・　基本的には野生動物に対して極力人間が手を入れていくべきではないと思うため、移動放逐が良い。

・　しかしながら、過去においても北海道がクマ牧場へ収容している事実があり、その時代の社会的要請等により判断していることもあり、今回はクマ牧場への飼養もやむなし。

（斜里町）

・　本ケースについて、人為物（生ゴミ）を採食した母グマについては、明確に行動段階２という判断ができるが、０歳子グマについては採食の事実は確認されておらず、齢的にも母親と行動を共にしていたことで学習したとは言い難く、問題個体とは断定できない。

・　一方で６か月齢の子グマが単独で生存できる可能性は低い。但し現場放置した場合、現地は公園利用者、車両の往来も多い地区であることから、過去の例から徘徊、道路など人前への頻繁な露出なども予想される。

・　知床国立公園・世界自然遺産登録地内・国指定鳥獣保護区内で、野生鳥獣の保護が優先される場所であり、今回ヒグマ親子が誘引された人為物は明らかに人側の過失で放置された生ゴミで、農作物等ではない。居住者個人の責任は言うまでもないが、公園管理という側面でも人側の責任は重い。

①　安楽殺処分

保護区外などでは選択されることが多い選択肢だが、今回の事案発生の背景も考慮すると、処置に疑問を持つ社会の反応も予想される。

②　奥地に移動放獣し、代理親への合流を期待する。

海外事例などで成功例はあるが、知床での実践例では他のクマに捕殺された事例も過去にあり、成功する確率は低い。

③　保護し、実績のある施設での永久飼養。

通常は受け入れ先を探す時間的余裕がなかったり、そもそも見つからない場合が多く、選択できない場合がほとんどだが、今回は既に受け入れ先が確保されている。また、今回受入側は人側の不適切な行為が野生動物の命を脅かす結果を引き起こすことなどを、飼養展示を通じて積極的に普及啓発したいという意欲も伺っており、飼養個体を通じて、ヒグマとの共存を進める上での必要な事項を伝える普及啓発効果も期待できる。